

## 学部留学生の日本語力と日本語科目の履修

今尾ゆき子

### 要旨

福井大学留学生センターでは、共通教育の日本語科目を履修する学部留学生の日本語力を把握するために、新入生オリエンテーション時にプレイスメントテストを行っている。本稿では、2004年から2008年までの5年間に実施したプレイスメントテストの結果をもとに学部留学生の入学時日本語力と日本語科目の履修状況を調査し、その実状と課題について述べる。まず、プレイスメントテストの導入に伴う日本語科目の再編成と履修方法の改訂について触れ、次いでプレイスメントテストの平均点、得点分布と正答率をもとに学部留学生の入学時日本語力を考察する。また、日本語科目の履修に関する実態調査を行い、日本語力が十分でない中級の学生も上級の学生と同じく3科目履修が半数を占めることを明らかにする。これらの調査結果を踏まえて、学部留学生が1～2年次のうちに大学生活に必要な日本語力を獲得できるように、4科目履修を実現するための方策と日本語科目のシラバスの整理・統合を提言する。

**キーワード：**学部留学生の日本語力 プレイスメントテスト 日本語科目の履修状況  
日本語科目の再検討

### はじめに

福井大学留学生センターでは、学部留学生<sup>1)</sup>を対象とするプレイスメントテストを2003年4月に実施して以来6年になる。従来、共通教育の日本語科目は中級と上級の2レベル6科目が開講されていたものの、学生の日本語レベルに関係なく履修可能であったことから、受講生の日本語力には大きな格差があった。加えて、学部、学科毎に異なる選抜方法も留学生の日本語力の多様化に拍車をかけていた<sup>2)</sup>。このような背景のもとで効果的な授業運営を行うために、学部留学生の入学時の日本語力を測定し、2つのレベルに分けるためのプレイスメントテストを導入した。しかし、2003年度はプレイスメントテストの導入にとどまり、実際にテスト結果をもとに日本語科目の履修指導が行われたのは、「履修の手引き」の改訂、日本語科目の再編成と時間割りの変更を経た後の2004年4月からである。本稿では、2004年から2008年までの5年間のプレイスメントテストの結果をもとに学部留学生の入学時日本語力と日本語科目履修状況を考察し、その実状と課題について述べる。

## 1. プレイスメントテストの導入と「共通教育科目 履修の手引き」の改訂

### 1) プレイスメントテスト

#### (1) プレイスメントテスト導入の経緯

2003年4月にプレイスメントテストを導入するまで、日本語科目受講者の日本語力には大きな格差があった。主な理由として、学科ごとに異なる入試要件により学部留学生の入学時日本語力

にバラツキがあること、受け入れ条件が日本語能力試験2級以上の交換留学生<sup>3)</sup>から日本語・日本文化研修生、聴講生、大学院生まで様々な身分の多様な日本語力を有する学生が受講していたことが挙げられる。さらに単位を必要とする学生と単位を必要としない聴講学生が混在し、学習目標の設定が難しく効果的な授業運営が困難であった。混在クラスの例として、表1に2002年度「日本語E」「日本語F」の受講状況を示す。

表1 2002年度 日本語上級科目の受講生

科目(受講者数)	所属 学部生 (単位有)	院生 (単位無)	非正規生(単位有)		非正規生(単位無)		
			交換	日研生	研究生	聴講生	短プロ*
日本語E(20人)	5(25%)	1	3	3	5	2	1
日本語F(24人)	13(54%)	2	1	2	4	1	1

\* 短期留学プログラム

表1からは、様々な所属の学生が様々な目的で受講していることが分かる。学部留学生の受講者数割合を見ると、「日本語E」で25%、「日本語F」では54%となっており、本来、「日本語科目」は正規学部留学生のために開講されている科目であるが、非正規学生の割合の大きいことが特徴としてあげられる。

## (2) プレイスメントテストの実施要領

2003年3月、「日本語科目」履修のためのプレイスメントテストを導入することが共通教育委員会において了承された。以下の要領でプレイスメントテストを実施し、学部留学生の入学時日本語力を測定して日本語科目履修のためのレベル分けを行った。

実施要領：

日時：2003年4月8日（以後、新入生オリエンテーション実施日の昼休み時間に行う）

12：15～12：45（30分）

試験：文法・語彙（筆記試験 90問）

試験問題の作成、試験監督、採点及びレベル分け判定は留学生センター専任教員が行う。

## 2) 「共通教育科目 履修の手引き」の改訂と日本語科目の再編成

### (1) 「履修の手引き」の改訂

プレイスメントテストの導入にともない、2003年と2004年に「履修の手引き」を以下のように改訂し、現在に至っている（表2）。

①日本語科目を履修する外国人留学生は、入学時の受講登録前にプレイスメントテストを必ず受ける（受けない場合は受講登録無効）。

②プレイスメントテストの結果、中級（A・B・C・D）と上級（E・F・G・H）にクラス分けをする。中級と判定された場合は、第1外国語として日本語中級4科目「日本語A・B・C・D」と

「応用日本語Ⅰ・Ⅱ」から4科目8単位を履修。その後の単位修得状況により、日本語上級4科目「日本語E・F・G・H」からも履修可。

③上級と判定された場合は、第2外国語として履修可。日本語上級4科目「日本語E・F・G・H」と「応用日本語Ⅰ・Ⅱ」から2科目4単位を履修。原則として、日本語中級科目の履修は不可。

また、3年編入生についても2006年に履修方法が改訂された。2005年度迄、3年編入生は入学時の日本語力に関係なく外国語科目として2科目4単位が一括認定されていたため、プレイスメントテストを受けず、日本語科目も履修しなかった。しかし、2006年度からは学部新1年生と同様の履修要件が適用され、プレイスメントテストの結果をもとに日本語科目を履修することとなった。原則として、高等専門学校出身者は2科目4単位の単位認定があるが、高等専修学校出身者には単位認定が無い。

①高等専門学校出身者

テストの結果、上級と判定された場合は、第2外国語として日本語を2科目4単位履修。ただし、2科目4単位の認定により履修要件を満たす場合は履修の必要なし。

テストの結果、中級と判定された場合は、第1外国語として日本語を4科目8単位履修。2科目4単位の認定により、3年次に2科目4単位を中級4科目から履修。

②高等専修学校出身者

上級と判定された場合は2科目4単位、中級と判定された場合は4科目8単位を履修。

(2)日本語科目の増設と時間割再編成

プレイスメントテストの導入に伴い、「履修の手引き」を以下のように改訂した。

①2003年迄の中級・上級各3科目から中級4科目「日本語A・B・C・D」、上級4科目「日本語E・F・G・H」に増設した。

表2 学部留学生の日本語科目履修規定(2003~2006) 下線部:改訂箇所

年度	日本語を第1外国語として履修する場合	日本語を第2外国語として履修する場合
2003	①日本語A・B・C・D・E・F・G・H* <sup>1</sup> から4科目8単位履修。 ②G・Hは応用日本語Ⅰ・Ⅱと代替可。 ③中級と判定された場合、A・B・C・D(中級)から履修。	①日本語E・F・G・H* <sup>1</sup> から2科目4単位履修。 ②G・Hは応用日本語Ⅰ・Ⅱと代替可。 ③上級と判定された場合、E・F・G・Hと応用日本語Ⅰ・Ⅱから履修。
2004	①日本語A・B・C・D・E・F・G・Hから4科目8単位履修。 ② <u>A・B・C・D・E・F・G・Hは応用日本語Ⅰ・Ⅱと代替可。</u> ③中級と判定された場合、A・B・C・D(中級)と <u>応用日本語Ⅰ・Ⅱから履修。</u>	①日本語E・F・G・Hから2科目4単位履修。 ② <u>A・B・C・D・E・F・G・Hは応用日本語Ⅰ・Ⅱと代替可。</u> ③上級と判定された場合、E・F・G・H(上級)と <u>応用日本語Ⅰ・Ⅱから履修。</u>

年度	日本語を第1外国語として履修する場合	日本語を第2外国語として履修する場合
	④中級の単位を取得後、E・F・G・H（上級）履修可*2。	④A・B・C・D（中級）の履修不可。
2006	<p>3年編入生にも同様の規定が適用。ただし、高等専門学校出身者は2科目4単位の単位認定あり（高等専修学校出身者は単位認定なし）。</p> <p>高等専門学校出身者：</p> <p>①プレイスメントテストで中級と判定された場合、4科目8単位の履修要件のうち、残る2科目4単位をA・B・C・Dと応用日本語Ⅰ・Ⅱから履修。</p> <p>②プレイスメントテストで上級と判定された場合、単位認定により2科目4単位の履修要件を満たす場合は、日本語科目履修の必要なし。</p>	

- \*1 日本語G・Hは2004年度からの開講科目で、2003年度は未開講のため応用日本語Ⅰ・Ⅱで代替とした。日本語全8科目を文化分野科目の応用日本語Ⅰ・Ⅱと読み替え可能としたのは、必修専門科目と重なり履修不可能な場合を想定しての対策であったが、日本語学習上の課題が残った。
- \*2 「中級の単位を取得後、上級科目の履修可」という規定があいまいなため、中級の単位取得後の履修方法について検討する必要がある（中級1科目と上級1科目履修のみというケースがある）。

②中級科目と上級科目を同一時間帯に開講して、上級と中級を同時に履修できない時間割とした。これにより、日本語科目が専門教科や英語科目の開講時間と重なって履修できない、あるいは、より簡単な中級クラスで好成績を得たいといった事情から、中級と判定された学生が上級科目を、上級と判定された学生が中級科目を履修する事態を回避した。同時に、時間割を再編成して混在クラスを無くした。その結果、日本語科目全8科目が火曜日の3限と4限に開講されることになった。この限定的な開講時間は、英語や専門科目の開講時間との重なりと相まって、科目によっては受講が特定の学科の学生に偏り、受講出来ない学生は応用日本語で読み替えという事態を招いた。表2に注記したように、本来、応用日本語Ⅰ・Ⅱは上級科目の「日本語G・H」との読み替え科目である。特に中級と判定された学生は日本語の学習が必用であり、日本語科目を週に1コマも受講せずに応用日本語Ⅰ・Ⅱで読み替えるという選択は問題である。そこで、2年次迄に日本語4科目を履修できるように、2009年度から3限と4限の授業を隔年入れ替えして受講状況を観察することとした。

## 2. 学部留学生の入学時日本語力

ここでは、2004年から2008年に行ったプレイスメントテストの結果をもとに、学部留学生の入学時における日本語レベルを概観し、各文法項目の正答率から見た日本語力について述べる。プレイスメントテストは1・2級レベルの文法・語彙を中心とした筆記試験で、経年変化を見るため5年間同一の試験問題を使用している。設問は90問で、格助詞、活用等の基本問題80問は各

1点、比較的難易度の高い10問は各2点の100点満点である。

### 1) 学部留学生の入学時における日本語レベル

プレイスメントテストの結果を概観し、学部留学生の入学時日本語力の特徴を述べる。

#### ①受験者数

学部入学新1年生の数は2004年と2005年が11名、2006年は倍増して22名、2007年は前年比3割減の16名、2008年はさらに2割減の13名である。2006年度から3年編入生も受験することになったが、2006年は5名、2007年は倍以上の12名、2008年は半減して6名と増減が激しい(表3)。

表3 学部留学生の入学時日本語レベル (3年): 内数

実施年度	2004	2005	2006	2007	2008
人数(3年)	11人(0)	11人(0)	27人(5)	28人(12)	19人(6)
平均点	47点	56点	56点	58点	53点
得点範囲	34~77点	28~87点	18~80点	26~90点	30~94点

#### ②日本語力

日本語力の経年変化をプレイスメントテストの平均点から見ると、2004年の平均点は47点と低かったが、2005年は56点に大幅上昇した。2006年が56点、2007年が58点で2004年に比べて10点以上高く、日本語力が向上してきたかに見えたが、2008年は53点に下がっている。これは1年生の低い得点に起因するものである(表3、表4)。

2006年から2008年までの3年間の学年別平均点を見ると、1年生は52点、54点、48点と50点前後である。一方、3年編入生は1年生と比べて相対的にレベルが高く、平均点は71点、64点、66点である。3年間の平均値は、3年編入生の67点に対して1年生は51点で、16点の較差がある(表4)。このことから、プレイスメントテストの平均点を押し上げているのは2006年から参加した3年生の得点によるもので、1年生の入学時日本語力がこの5年間で高くなってきたとはいえない。

表4 学年別日本語レベル

年度		2004	2005	2006	2007	2008	平均*
平均点	1年	47点	56点	52点	54点	48点	51点
	3年	—	—	71点	64点	66点	67点
得点範囲	1年	34~77点	28~87点	18~77点	26~90点	30~79点	—
	3年	—	—	40~80点	42~86点	37~94点	—

\*3年間(2006~2008年)の平均値

③日本語力の多様化

2004年から2008年度までの得点範囲を見ると、最高点が77点から94点へと上昇傾向にあるが、最低点は30点前後である。日本語力の高い学生が入学してくる一方で、連続授業での集中学習が必要と考えられる30点台（時には20点台、10点台）の学生が、毎年3～6人含まれ、入学時における学部留学生の日本語力の多様化が進んでいる（表3、表4）。また、入学年度によっても学生の日本語レベルが大きく異なっていることが挙げられる。以下、年度別に得点分布の特徴を見る。

2004年：低い平均点(47点)を中心に90%が集中し、ほぼ正規分布している(図1)。

2005年：平均点(56点)の右隣が高く、60点台が11人中5人と約半数を占める。50点台が2人、40点台～20点台が各1人と分散的である(図2)。

2006年：平均点(56点)の右隣が高く、60点台の8人をピークに70点台4人、80点台が2人である。60点台以上が27人中14人で半数を占める。山の左側は50点～30点台が各4人とほぼ均一的に分散し、10点台1人である(図3)。

2007年：平均点(58点)の前後が最も多いほぼ正規分布型である。50点台が28人中10人で約30%を占める。山の右側では、60点台7人、70点台4人、80点台、90点台各1人で、60点以上が28人中13人と約40%を占める。山の左側はJ字型で、40点台2人、30点台と20点台が各1人と少数分散である。低得点者が少なく、58点と高い平均点を産む結果につながっている(図4)。

2008年：平均点(53点)の左側が高く右側が低い下降曲線を描いており、平均点以下の低得点者が多いことが分かる。30点台が19人中6人と最も多く、40点台の3人と合わせると約半数の9人(47%)である。60点台2人、70点台4人、90点台1人である(図5)。

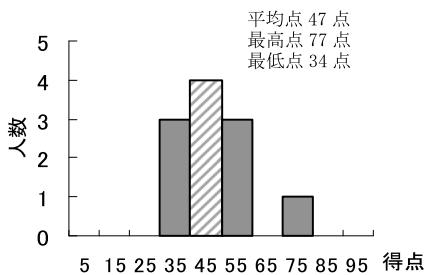


図1 2004年度の得点分布(11人)

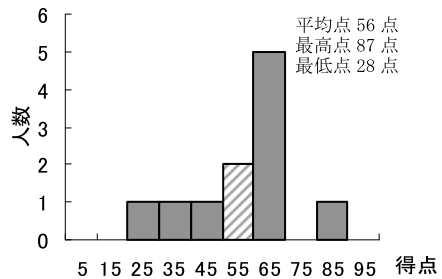


図2 2005年度の得点分布(11人)

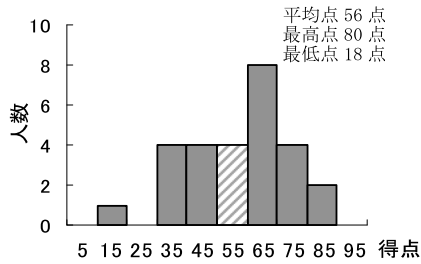


図3 2006年度の得点分布 (27人)

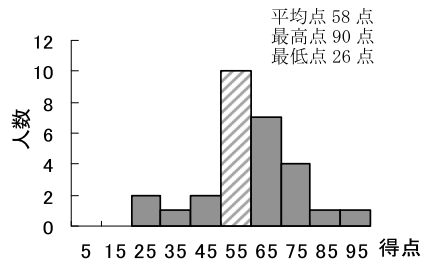


図4 2007年度の得点分布 (28人)

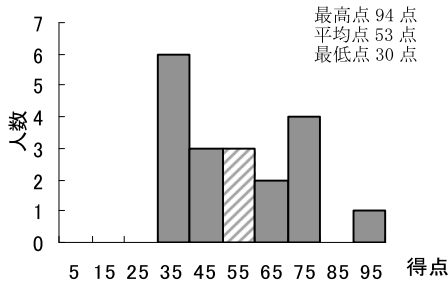


図5 2008年度の得点分布 (19人)

学年別の得点分布を見ると、1年生の場合、2006年は平均点(52点)を上回る60点台が8人と最も多く70点台を加えると22人中10人(45%)を占める。その一方で50点台～30点台にはほぼ同数が分散している。山の右側は70点台が2人だけで、3年生を含めた得点分布に比べると高得点者が少ないことが分かる(図3、図6)。2007年は、平均点(54点)の50点台が7人と最も多く、40点台～20点台に各1～2人分散している。ところが、2008年では平均点(48点)の40点台が2人と少なく、その両側が高い双山型である。30点台が5人で最も多く、40点台と合わせて50%以上を占める。平均点より高い右側は50点台3人、60点台2人、70点台1人で、この5年間で最も特異な得点分布を示している(図1～2、図6～8)。

3年編入生の場合には数が少ないため、3年間の総数23人の得点分布を図9に示す。平均点(67点)の右側に山があり70点台が最多の8人(35%)である。60点台4人、80点台3人、90点台1人で併せて60点以上が16人と約70%を占める。しかしその一方で、毎年、40点あるいは30点台の学生が1～2人含まれ、3年編入生の日本語力も多様である。

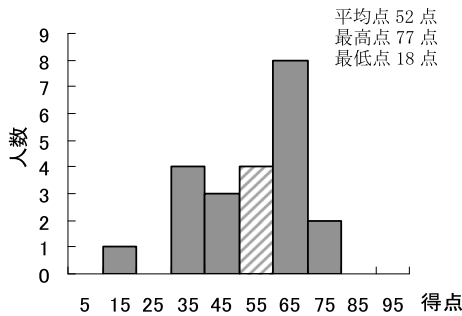


図6 2006年度1年生の得点分布(22人)

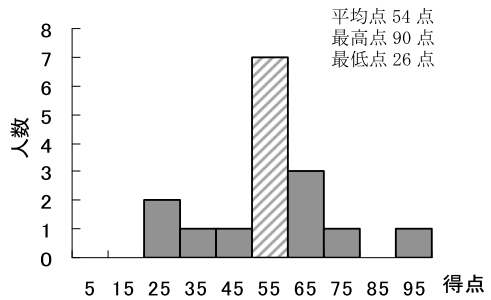


図7 2007年度1年生の得点分布(16人)

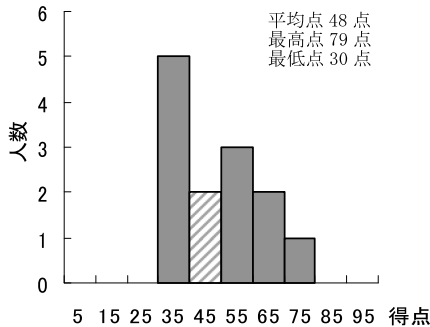


図8 2008年度1年生の得点分布(13人)

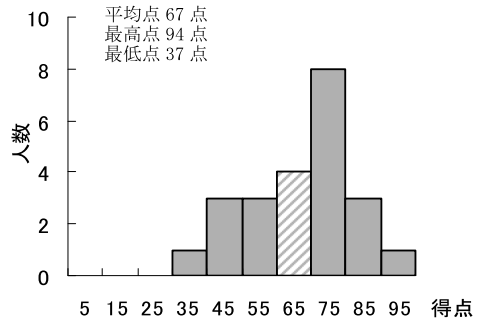


図9 3年生の得点分布 2006-2008 (23人)

## 2) 正答率

プレイスメントテストは日本語科目履修のために行うレベル分けテストであるが、授業開始前に学生の日本語力を把握するチェックテストでもある。テスト問題の開示が困難なため、問題を大まかに項目分類して、正答率(5年間の平均値)をもとに日本語の理解度、到達度を概観する(表5)。

### (1) 格助詞

初級で学習する格助詞の基本的な用法を確認した記述式の問題である。基本的な格助詞である起点を表す「カラ」や場所を表す「デ」等の正答率は60~70%である。正答率が最も高いのが「NノN」で90%である。これに対して、「塾ニ通う」の「ニ」が40%、強制使役「ヲ」と複合助詞「ニツイテ」の正答率は低く(20~30%)、特に2004年は両項目とも0%である。初級の基本的項目は理解しているが、1・2級レベルの項目は理解できていないと言えよう。



(2) 基本動詞・形容詞の活用

基本動詞の可能形、禁止形、受け身形の三択問題では、正答率は70～90%とよく出来ている。記述問題では、動詞の「ます形」から意向形や辞書形（～ように、～のが、～ために）、「て形」「語幹＋ながら」への変換は正答率が高い(70～80%)。しかし、「バ条件形」への変換や動詞の自他を選択して活用させる問題は30～40%と低い。「ます形」から「た形」へ変換する項目（「V たばかり」「V たほうがいい」「V たところ」）も正答率が低くなる(30～40%)。

形容詞については、イ形容詞の過去形、「語幹＋すぎる（例：早すぎる）」、「～そうだ(伝聞)」、ナ形容詞の普通形への変換は50%前後である。留学生の半数が「動詞＋機能語」の中・上級表現や形容詞の基本的な用法が定着していないことを示している。

(3) 敬語・恩恵の授受（～てもらう・ていただく）・受け身・条件・許可を求める表現など

敬語表現、丁寧な依頼表現（ていただけませんか、お～願えませんか）は三択問題の場合は30～45%であるが、記述問題では10～20%と正答率がきわめて低くなる。同様に、恩恵の授受表現（～てもらう、～てくださる）の記述問題も10～20%である。使役形を用いた許可を求める表現（～させてください）は、特に低く15%である。一方、被害の受け身は55%と約半数が正答しており、条件・理由文の文末制限も三択問題で50%前後である。

(4) 機能語（ノ・コト・複合助詞・ワケ）・語彙（副詞など）

複合助詞は、記述問題では20%前後であるが、三択問題では70～80%と高い正答率である。機能語「ノ・コト・モノ・ワケ」等の三択問題は50～60%であるが、「～ナイワケにはいかない」の正答率は26%と低い。副詞（擬態語・時間関係）など語彙の三択問題の正答率は20～40%と一般的に低い。1・2級レベルの機能語・語彙問題は三択形式としたが、「たちまち、たまに、どうにか」といった副詞の正答率が特に低い。

表5 正答率

\*正答率：5年間の平均値<sup>4)</sup>

項目		正答率*(%)	問題形式	レベル
助詞	格助詞			初級
	・と（時）、NのN	80～90	記述	
	・から（起点）、へ（方向）	70	記述	
	・で（場所）、Nの（代わりに）	64	記述	
	・に（通う）	41	記述	
	・を（使役）	22	記述	
	複合助詞			中級～ 上級
	・～に（ついて、対して、とって）	80	三択	
	・～について	23	記述	
	・の、こと、もの、わけ	50～60	三択	

項目		正答率* (%)	問題形式	レベル
	・～ないわけにはいかない	26	三択	
動詞	・ます形→可能、受け身、禁止形	80～90	三択	初級～ 中級
	・ます形→否定、意向、辞書・て形	70～80	記述	
	・ます形→ば条件	31	記述	
	・自動詞・他動詞（＋ている・である）	30～40	選択・記述	
	・～た（ばかり・ほうがいい・ところ）	30～40	記述	
形容詞	イ形容詞			
名詞	・過去形、連用形（～くする）	50～60	記述	初級
	・語幹（＋すぎる）、辞書形＋そうだ（伝聞）	40～50	記述	
	ナ形容詞：ます形→普通形	51	記述	
	名詞＋だ：N＋です→Nのようだ	23	記述	
表現	敬語、丁寧な依頼（～ていただけませんか）	30～45	三択	中級～ 上級
	恩恵の授受（～ていただき、～てくださる）	15～20	記述	
	被害の受け身、条件・理由文の文末制限	50～60	三択	
	使役形を使った許可を求める表現	14	記述	
語彙	副詞（たちまち、どうか、オノマトペ等）	20～40	三択	上級

### 3. テスト結果によるレベル分けと日本語科目の履修状況

#### 1) テスト結果によるレベル分け

共通教育の日本語科目は上級と中級の2レベルが開講されていることから、プレイスメントテストでは科目履修のために2レベルに分けている。レベル判定に際しては、原則として平均点を基準に中級と上級のクラスサイズ（人数）を考慮して行っている。表6に2004年度から2008年度までのプレイスメントテストの結果とレベル分けを示す。

表6 プレイスメントテストの結果とレベル分け (\*平均点：小数点以下四捨五入)

実施年		2004	2005	2006	2007	2008
テスト結果						
受験者数		11人	11人	27人	28人	19人
全体平均点		47点	56点	56点	58点	53点
レベル分割点		60点	56点	52点	59点	61点
上級	平均点(人数)	68点(2人)	65点(7人)	67点(16人)	69点(15人)	73点(7人)
	得点範囲	59～77点	56～87点	52～80点	59～90点	61～94点
中級	平均点(人数)	43点(9人)	40点(4人)	39点(11人)	44点(13人)	42点(12人)
	得点範囲	34～50点	28～50点	18～52点	26～57点	30～59点

中級と上級の平均点を比べると、その較差は大きい。1年次に中級2科目を履修した後、2年次に上級科目を履修する学生の場合、授業についていくのが困難なことがある。上級科目は日本語・日本文化研修留学生や能力試験1級を取得した交換留学生等も履修するため、さらに授業のレベルが高くなるからである。

## 2) 履修状況

テスト結果をもとに中級、上級の2レベルに分けられた学生は日本語科目と文化分野の応用日本語Ⅰ、Ⅱから4科目(8単位)あるいは2科目(4単位)を選択し履修する。

### (1) 1年生の履修

#### ① 中級と判定された場合

中級と判定された学生のうち日本語能力試験2級受験者(2級合格者ではない)が多い。このような場合、大学での学業を遂行するための日本語力は十分とは言えず、1年次に日本語4科目を履修することが望ましい。しかしながら、日本語科目の履修状況を見ると1年次と2年次で3科目以下の履修が約6割を占めている(表7)。日本語科目が火曜日の3、4時限に集中し、かつ専門科目の開講時間帯と重なっていることが主たる原因である。加えて、応用日本語との読み替えが可能なこと、科目の選択を学生の自由に任せていることなどが考えられ、対策を講じる必要がある。

履修状況を詳細に見ると、2004年から2007年迄の中級と判定された32人のうち、日本語を4科目履修した学生は13人(41%)である。最も多いのは3科目履修の16人(50%)で、2科目、1科目のみの履修が3人(10%)である。このうち、4科目履修者は、1年次に中級2科目と2年次に上級2科目を履修、または1年次に中級3科目と2年次に上級1科目を履修するケースがほとんどで、1年次に中級4科目の履修は1例のみである。

3科目以下の履修者は19人(59%)で、4科目の履修要件を満たすために不足分の1科目ないしは2科目を応用日本語で読み替えていることになる。3科目履修者のうち、中級科目のみを選択する場合がある。1年次に中級3科目を履修あるいは1年次に中級2科目、2年次も中級1科目を履修するケースである。このように中級科目ばかり履修するケースは2004年度に多発したが(9人中6人)、その後は2006年の中級3科目履修と2007年の中級2科目、中級1科目の3例のみである。こうした事例は、単位取得が容易、あるいは奨学金取得のために好成績が必要といった理由から、中級を3科目を履修し、不足の1科目は応用日本語での読み替えを前提とした選択の可能性がある。また、1年次に中級2科目と2年次に上級1科目の3科目履修者の場合、中級または上級科目の単位取得に失敗しても、受講可能であるにもかかわらず再履修せず、応用日本語で読み替えるケースが散見される。同様に、2科目あるいは1科目のみの履修者も応用日本語での読み替えを前提に日本語4科目を履修していない。日本語の習得が最も必要とされる中級学習者が日本語科目の単位取得に失敗しても、応用日本語を履修していれば、再履修せずに履修要件が満たされるという状況は検討すべきである。

一方、日本語科目が開講されている火曜日の3、4時限に専門必修科目が開講されているために2年次までに3科目しか履修できない場合が過去4年間のうち1例ある。2004年の機械工学科がその例である。また、専門必修科目ではないが、専門選択科目が同一時間帯に開講されていると日本語科目ではなく専門科目を選択することが多く、3科目履修という結果になる。2007年度の場合、中級履修者10人中8人が3科目履修で、4科目履修者は1人もいない。8人中7人が電気電子工学科の所属で、1年次前期火曜日の4時限は専門選択科目を受講するために日本語科目を履修せず、2年次後期には3、4時限とも専門必修科目が開講されていることから、日本語の履修は1年次前期、後期に各1科目と2年次前期に1科目の合計3科目を履修し、不足分は応用日本語で読み替えという選択がなされている。

いずれにせよ、専門科目の時間割と重なって4科目の履修が困難という理由のもとに、応用日本語で読み替えるという方策は、履修のための安全弁であると同時に、日本語を2科目あるいは3科目の履修で済ませるための逃げ道であり、両刃の剣となっている。中級と判定された場合は、応用日本語での読み替えをなくして日本語4科目の義務的履修が可能な方法を考える必要があるだろう。

表7 中級と判定された1年生の日本語科目履修状況 (2008年10月現在)

履修 科目数	履修年次		履修者数(人)				総数：32人
	1年次	2年次以降	2004(9)	2005(4)	2006(9)	2007(10)	計
4科目	中級4科目		1	(1)*	0	0	13(41%)
	中級2科目	上級2科目	1	0	2	0	
	中級3科目	上級1科目	2	(2)*	4	0	
3科目	中級3科目		1	0	0	0	16(50%)
	中級2科目	中級1科目	2	0	1	0	
	中級2科目	上級1科目	2	1	1	8	
2科目	中級1科目	中級1科目	0	0	0	1	2(6%)
	中級1科目	上級1科目	0	0	1	0	
1科目	中級1科目		0	0	0	1	1(3%)

注\* ( )\*: 中級科目を登録したが、教員の急病による休講のため上級科目に変更。

②上級と判定された場合

上級と判定された場合、第2外国語として日本語を2科目4単位選択することもできるが、第1外国語として4科目8単位を履修する学生がほとんど(約81%)である。このうち64%が3科目履修で、2科目履修の5人と合わせて19人(86%)が必要単位を応用日本語科目で読み替えている(表8)。上級の場合も第1外国語としての履修希望者が80%を越えることから、日本語を4科目履修できるような方策を考える必要がある。一方、2科目履修者の中には日本語上級の単位取得に失敗して、再履修しないまま応用日本語科目で読み替えている場

合がある。第2外国語として履修する5人を含む2科目履修者10人については、うち7人が非漢字圏の学生で、さらなる日本語学習が望まれる。ともあれ、上級と判定された学生も4科目履修が必要な中級の学生も、同じように3科目履修者が半数を占めている状況は改善するべきであろう。

表8 第1外国語として日本語を履修する上級者の日本語履修状況 (2008年10月現在)

入学年度		2004	2005	2006	2007	合計
上級と判定された学生数 (%)		2	6	13	6	27(100)
第1外国語として日本語を履修する学生数 (%)		2(100)	4(67)	12(85)	4(67)	22(81)
日本語履修状況	4科目履修者数 (%)	1	1	0	1	3(11)
	3科目履修者数 (%)	1	3	7	3	14(52)
	2科目履修者数 (%)	0	0	5	0	5(19)

(2)3年編入生の履修

3年編入生のうち高等専門学校出身者のほとんどが4単位の認定を受けて入学している。上級と判定された場合、履修要件の4単位が認定により満たされるため、日本語科目を履修する必要がない。2006年度から2008年度までの3年間にプレイスメントテストを受けた編入生23人のうち約半数の12人が日本語科目を全く履修していない。2006年度では、編入生5人中4人、2007年度では12人中6人、2008年度は7人中2人が上級4単位認定者で日本語科目を全く履修していない。このような状況から編入生にとってプレイスメントテストは入学時の日本語力測定あるいは上級・中級の判別のみで、日本語科目履修のためのレベル分けテストの意味が薄れてきている。一方、高等専修学校出身者は、原則として日本語科目の単位認定がない。2006年から2008年までの3年間における入学者5人全員が上級と判定され、5人中4人が単位認定を受けずに日本語2科目4単位を履修している(表9)。

表9 3年編入生のレベル判定結果 (内数): 専修学校出身者数

年度 レベル	2006	2007	2008	計
上級	4(1)	9(2)	4(2)	17(5)
中級	1	3	2	6

これに対して高等専門学校出身者は、少数ではあるが毎年のように中級と判定されるケースが生じている。高等専門学校で3年間、日本語で行われる授業や試験をこなして卒業認定を受けた後に大学3年編入という経緯を考えれば、上級と判定されるレベルの日本語力を備えているはずである。日本語能力試験3級程度で3年に編入というのであれば、専門科目の履修上問題がある

う。しかし一方で、単位取得が容易な中級科目を履修するためにプレースメントテストの設問に取って解答せずに答案を提出した事例が生じていることも事実である。今後、このような事態を避けるためにも、3年編入生については、日本語科目の履修を上級科目とし、クラス分けの対象から外すことも検討する必要があるだろう。なお、中級と判定された高等専門学校出身者の日本語履修は、単位認定の関係から、日本語科目を全く履修しない場合、日本語1科目または2科目と多様である(表10)。

表10 中級と判定された高等専門学校出身者の日本語履修状況

履修状況	年度	2006	2007	2008	計
	中級2科目+4単位認定		0	2	1
中級1科目+応用日本語2科目+2単位認定		0	1	0	1
4単位認定(日本語2科目未履修)		1	0	0	1

#### 4. 今後の課題

学部留学生の入学時日本語力が多様化する中、日本語力に即した日本語科目の履修を目指してプレースメントテストを導入し、「履修の手引き」を改訂して対応してきた。5年間にわたる学生の日本語力と日本語科目の履修状況を考察した結果、浮かび上がった課題を以下にまとめ、その対策を提言する。

##### 1) 3年編入生のプレースメントテスト

2006年以降、3年編入生がプレースメントテストに参加しているが、テスト実施時に単位認定についての情報が未入手であった。したがって、単位認定者に関する十分な情報がないまま、全受験者の平均点とクラスサイズ(人数)をもとに2つのレベルに分けていた。しかし前章3.2) (2)に記したように、上級と判定された4単位認定者は日本語を履修しないため、クラスサイズの点から、上級4単位認定者を除外した実質履修者数を2分するべきであった。今後は、教務課から事前に単位認定者に関する情報を入手し、実質履修者数を把握した上で、実情に即したレベル分けを行うことが望ましい。また、3年編入生で日本語の単位が必要な場合は、原則として、日本語上級科目を履修する方向で検討したい。

##### 2) 履修指導と「履修の手引き」の改訂

中級と判定された場合、中級(A、B、C、D)と応用日本語IⅡから履修し、「その後の単位修得状況により上級(E、F、G、H)の日本語を履修できる場合がある」と規定されている。中級学生の4科目履修については、中級4科目履修を原則とするのか、1科目でも中級を履修すれば上級が履修可能なのか「履修の手引き」では具体的に明記されていない。こうした履修規定の曖昧さ

が、中級 2 科目、中級 1 科目のように中級科目のみを履修し、単位取得に失敗しても再履修せず  
に不足単位を応用日本語で読み替える要因となっている。このような事例をなくすために、中級  
と判定された場合の日本語科目の履修方法を以下のように変更することが望まれる。

- (1) 日本語科目を 3 科目以上履修する (4 科目が望ましい)。
- (2) 中級 2 科目あるいは 3 科目履修後、上級を履修する。
- (3) 中級科目の単位が取得できなかった場合は中級科目を再履修する。
- (4) 中級 1 科目、上級 1 科目のみの 2 科目履修は不可とする。

### 3) 応用日本語 I、II との単位読み替え

中級と判定された場合は、日本語 4 科目の履修が望ましい。しかし、その約 6 割が 3 科目以下  
の履修で、不足分を応用日本語 I、II で読み替えている。また、1 年次から読み替え可能な応用  
日本語を安全策として履修していれば、日本語科目の単位取得に失敗しても再履修せずに履修要  
件が満たされるという状況がある。

火曜日 3,4 時限に開講される日本語科目が専門必修科目や他の外国語科目の開講時間帯と重な  
るために、履修不可能な場合の対策としての読み替え措置が、2 科目あるいは 3 科目履修で済ま  
せるための逃げ道になっているきらいがある。前述のように 2004 年から 2007 年までの 4 年間で、  
火曜日の 3,4 時限に専門必修科目が開講されているために 2 年次までに日本語科目が 3 科目しか  
履修できない時間割となっているのは、2004 年度の機械工学科のみである (3. 2) (1)参照)。可  
能な限り、読み替えを無くす方策を考えていきたい。少なくとも、中級と判定された場合は、応  
用日本語での読み替えは不可とするのが望ましい。

### 4) 日本語科目開講時間の変更

応用日本語 I、II との単位読み替えをせずに日本語を 4 科目履修可能にするためには、以下の  
ように時間割の変更を検討する必要がある。

- (1) 2009 年度以降、火曜日 3 時限と 4 時限に開講されている日本語科目を隔年で交代して履  
修状況を観察する。
- (2) 専門必修科目と重ならないように日本語科目の開講時間を 1 時限目の共通教育科目開講  
時間帯に変更する。
- (3) 火曜日 3、4 時限に開講されている英語科目、工学部の専門必修科目、専門選択科目と調  
整を図る。

以上、学部留学生の日本語力を向上させるべく、日本語 4 科目履修のための方策を提示したが、  
3 級レベルの学生の日本語力は 4 科目を履修しても大学での勉学を遂行するには不十分である。  
そのような場合、全学日本語科目を補習的に受講できるよう、指導教員との密な連携が必要であ  
らう。

このような履修上の問題の他に、学部留学生の日本語力を高めるためには、日本語科目の内容

の整理・統合が必要である。これまで日本語8科目全体のカリキュラムは上級・中級という区別のみで、教科内容に関する統一した方針がなく、各科目のシラバスは担当教員の裁量にまかされ、科目間のきめ細かな調整がなされてこなかった。日本語科目は文法、会話、講読、作文と技能別に特化した科目として開講されてきたわけでもなく、科目を履修するごとに技能が段階的に積み上げられていくシステムが構築されていなかった。加えて2008年度から、短期プログラムコースの学生も共通教育の日本語科目を履修することになった。このコースの「日本語中級」と「日本語上級」は4単位であることから、共通教育の日本語科目を1学期に2科目受講して1科目4単位の履修となる。したがって、中級科目間、上級科目間の連携はもとより中級から上級への連続性を念頭に入れてシラバスを再検討し、科目間で授業内容の調整を図ることが急務である。

注)

- 1) 2008年5月1日現在、福井大学(3学部:教育・医・工)学部学生数4,076名のうち外国人留学生数は239名である。このうち学部留学生数は84名で本学に在籍する留学生の35%を占める。なお、非正規学部留学生は特別聴講生・科目等履修生が28名で、学部留学生と特別聴講生・科目等履修生が共通教育日本語科目を履修する(表11)。

表11 福井大学の留学生数 (2008年5月1日現在)

所属	学生数(留学生)	大学院(留学生)	非正規留学生	
			研究生	特別聴講・科目等履修生
教育	715(5)	122(13)	7	12
医	850(0)	113(8)	0	—
工	2,511(79)	648(91)	8	16
合計	4,076(84)	883(112)	15	28

- 2) 留学生の出願資格要件および選抜方法は学部、学科によって異なるが、留学生試験(400点満点)の合計得点が選考基準となっている。選考基準が日本語科目の得点ではなく、合計点の何割という数値は、他の専門科目が高得点の場合、日本語科目の得点が低い可能性もあって、留学生試験の合計得点から入学時の日本語力を正確に予測することは困難である。また、本学に在籍するマレーシアからの留学生は全て政府派遣で、入学者数の変動も大きい。入学試験が無いことから日本語力も多様である(表12)。



表 12 マレーシア政府派遣留学生のプレースメントテスト結果

年度	2004*	2005*	2006		2007		2008	
学年	1年	1年	1年	3年	1年	3年	1年	3年
受験者数	2	5	11	4	6	9	1	4
平均点	47	47	53	69	43	64	47	58
得点範囲	43～50	28～66	18～77	40～80	26～67	42～86	47	37～73

\* 2004～2005年の3年編入生は受験せず。

- 3) 共通教育日本語科目を履修する教育学部交換留学生の受け入れ条件は日本語能力試験 2 級以上となっており、その多くが 1 級を取得して留学してくる。交換留学生、日本語・日本文化研修留学生など非正規生のプレースメントテストの結果を表 13 に示す。

表 13 非正規生のプレースメントテスト結果\*1

年度 テスト結果	2007		2008	
	前期(8人)	後期(4人)	前期(7人)	後期(4人)
平均点	66点	59点	75点	80点
上級平均点	70点(6人)	70点(2人)	81点(6人)	80点(4人)
最高点	77点	74点	93点	90点
最低点	56点	43点*2	39点*3	62点

\*1 短期プログラム A コースの学生は除く。

\*2 2008 年度から短期プログラム A コースの受け入れになった。

\*3 共通教育の日本語科目を受講しない学生。

- 4) 正答率が 30～70%の範囲外の項目については識別率を考慮に入れて検討し、適宜、設問を修正していく。

#### 参考文献

- 小川誉子美・丸山千歌・奥野由紀子(2004)「学部留学生の日本語力に関する報告—中級者に対する試みと提案」『横浜国立大学留学生センター紀要』第 11 号 pp. 31-45.
- 小川誉子美・丸山千歌・奥野由紀子(2006)「学部留学生に対する日本語教育改革試案—プレースメントテストの試行と中級日本語クラスの報告—」『留学生センター教育研究論集』13 号 横浜国立大学留学生センター pp. 55-67.
- 小川誉子美・丸山千歌(2006)「日本語教育の現状と課題—学部留学生の日本語教育を中心に」『留学交流』vol. 18 NO. 3 ぎょうせい pp. 2-5.
- 奥野由紀子・丸山千歌・四方田千恵(2008)「プレースメントテストと学部中級日本語クラスに関する報告」『留学生センター教育研究論集』15 号 横浜国立大学留学生センター pp. 75-92.

- 桑原陽子(2008)「留学生に必要な日本語力とは？」『福井大学（文京キャンパス）共通教育フォーラム』NO.9 福井大学共通教育センター p.7.
- 国際交流基金(1998)『平成9年度マレーシア予備教育調査団報告書』
- 小山令子(2007)「中国人留学生の日本語力—現状と今後の留意点」『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』第7号 pp.237-242.
- 坂本正(2008)「大学で学ぶ長期留学生と必要な日本語力」『留学交流』vol.20 NO.3 ぎょうせい pp.2-5.
- 谷口正昭(2006)「マレーシア・マラヤ大学予備教育部日本留学特別コースにおける日本語教育」『日本語教育センター紀要』2号 pp.114-125.
- 日本語能力試験実施委員会監修(2007)『平成17年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』国際交流基金、日本語国際教育支援協会.
- 福井大学共通教育センター『共通教育科目 履修の手引き』（平成14年度～平成20年度）

The Japanese Language Ability of Undergraduate International Students and the Course Selection in Japanese Language

IMAO Yukiko

Keyword:

Japanese language ability, Undergraduate international students, Japanese Placement Test, Course selection in Japanese language, Japanese Language Programs

Abstract

The International Student Center has conducted the Japanese Placement Tests for new undergraduate international students, in the orientation program. This paper examines their Japanese language ability from viewpoints of the average marks, distribution of scores and the percentage of correct answers, using the test results from 2004 to 2008. It also includes the investigations into the realities of the course selection, how students take courses and credits in Japanese Language. These investigations proved that they need to take four or more courses within one or two years after enrollment, and it is essential to review Japanese language programs, syllabus, courses and timetable for the improvement of their Japanese language skills.